



愛の論理、
君の論理



佐藤 大地

「愛の論理、君の論理」

「あなたの言っていることの意味が分かりません。私はあなたを軽蔑します」

いきなり、何の前触れも無く私の心は抉られた。情報社会にまぎれてそのメールは単なるデータとして私の携帯電話に送信されてきた。その内容もさる事ながら、メールというあまりにも無機質な活字の波、データの海の中で私はその日、一日溺れていた。

理由が分からない。拒絶される事の意味も軽蔑された理由も心当たりが無かった。はかりかねた。私が何をしたというのだろう。ただ、放課後にお茶でもしないかという事を洒落た言葉と共に伝えただけではないか。それが何故この仕打ちなのだろう。彼女が困る事や嫌がる事の一つもしていない。する事ができないはずなのだ。私は酷く臆病で、人の表情を伺いながら生きてきたような人間なのだ。そんな私にも思い上がった部分があるというなら私はどうやって生きていけばいいのだろう。

「この間はごめんなさい。実はわたし、男の人が怖いんです。あなたを傷つけてしまった事は謝ります。でも、これ以上私に関わらないで下さい。それがあなたのためです」

なんて悲しい話だろう。私は彼女がこの世の全ての喜びをかき集めたかのような笑顔を見せる事を知っている。感受性が高くて他人を思いやれる優しい人である事を知っている。そんな魅力溢れる人なのに人との関わりを拒絶するなんて。この世は何と恐ろしいのだろう。虚しいところなのだろう。あんなに素晴らしい人間を内向的にする。

この世は私が全幅の信頼を置いていたただ一人の人、その人の可能性を狭めてしまっている。だったらこの酷い世界の中でせめて私は彼女の幸せを願いたい。拒絶されてしまってもそれくらいの権利はあるだろう。それがたとえエゴであっても構わない。彼女が幸せにさえなってくれば。私は頑張ろうと決めた。この世が恐ろしい人や恐ろしいもの、恐ろしい原理によって動かされているのならそれを正したい。ぶち壊したい。社会に出て社会をもっと綺麗にしたい。

「やっぱ、あいつおかしいよ。メールで放課後誘うなんてありえない。ダサいよ」

耳を疑った。他でもない、信頼しているあの子の声だ。あの子に似つかわしくない言葉が教室から聞こえてくる。でも仕方ないのだろう。彼女は男性を信じられなくなっている。どんな恐ろしい事があったのかも分からない。だったらそれはある意味当然の反応であるのだろう。私が頑張るから。酷い目にあわない社会にしてあげるから。そんな君に似つかわしくない言葉を君が口にしなくても良いようにしてあげるから。

「あっ」

教室から出てきた彼女はあれほど嫌った男と仲睦まじく手を繋いでいた。

「ごめん」

弁解なんてしないでくれ。君は被害者なのだろう。その男が強制してきただけだろう？ だったら君は何も謝る事なんて無いじゃないか。

孤独が世界を包むような夜に私は狂ったように勉強をしてこの世界を造成する準備をしている。そしていつかは狂ったように仕事をするのだろう。そして世界を造成するのだろう。私はそれを願ったし、それが正しい答えであると信じた。

「なあ、こいつ誰？」

彼女の隣に居る不良風の男が聞いた。

「あとで言うから」

彼女はそう言う私から目をそらして男と共に階段を降りた。

——ダメだよ。あんな男の言いなりになっては。あいつが悪い奴なんだろう？——

彼女らが階段に向かう途中、こんな事を喋っていた。

「喋っちゃダメだって。あれがさっき私が言っていた男よ。絡まれたら困るんだからあいつの前では喋らない方がいいわ」

私はどう言われようと頑張りたい。彼女の為に頑張りたい。そう思って生きていた。狂ったように世界を造成する準備をしていた。

「気持ち悪いので付きまとわないで下さい。困るんです。そういうの」

いきなりの言葉に言葉を失った。感情が色を失った。彼女の言葉は半ば被害妄想だった。実際には私が彼女と接触したのはあの拒絶のメール以降、一回だけ。あの不良男の件だけだ。それは彼女への配慮というより私が彼女に感じた気まずさによる近寄りづらさのせいだった。しかし、そうだとしてもまかり間違っても付きまとっているなんて言われる要素はなかった。

造成された世界の上に僕の好きなあの子はどこかの男と遊んでいる。私が造成しようとした世界の上に彼女はどこの馬の骨と分からない男と青春をしている。多分きっとそうなのだろう。

私は彼女に必要とされないばかりか、この世界に存在しない事を望まれているのだろうか。

誰にも必要とされないというなら、せめて社会の歯車になりたいじゃないか。それさえ許されない（憎まれる）というなら死ぬしかないじゃないか。

私は死ぬのは怖かった。生きるのはとても億劫で退屈な事の連続に思えた。

私にとっては彼女が全てだったし、それ以外のものに価値はなかった。

私にとって情感を持たず無表情で無機質と成り果てたこの世界では耳はコードが断線したイヤフォンのように断片的に世界を聴かせ、瞳は伸びたビデオテープのように世界を映す。

私はそんな世界の上を生きる事はままたらなかつた。

何か価値あるものを見つけなくては。彼女以上でなくて良い。彼女の代わりに務まればそれで良い。

それでもそんなものを探す事は困難を極めた。他の異性にそんな価値を見出せなかつたし、第一、その頃には異性を信じる事自体に抵抗を持ち始めていた。あの時と同じように拒絶されたらどうしよう。私に好意を持ってくれなかつたら意味がない。もし、好意を持ってくれていてもその好意がいつまで続くか分からない。彼女のように突然どん底の態度を示されたら私は生きていけるのか？信じていた人に裏切られる事の絶望感だけはもうごめんだ。周りを見てみる。やれ不景気である。やれ熟年離婚である。家庭なんてすぐ崩壊する。悲しいけれどもそんな時代に生まれ落ちたのだ。恋人や家族を信じるというのはあまりにリスクではないか。それが恋人でもない段階の人間を信じるなんて不可能に近い。

怖いのだ。恐ろしいのだ。悲しい思いをしたくないのだ。

ならば何を信じれば良い？人間以外の何を信じれば良い？

私を裏切らず、いつまでもそこに居てくれるもの。

金を信じれば良いのではないか？世間では金好きの人間を拝金主義だの銭ゲバだの守銭奴だの罵る。しかし、それは真実なのか？世間の人間は金が嫌いなのか？いや違う。金を持っている人間が羨ましいのだ。一生懸命働いている人間ほど金が欲しいのではないか。もちろん、違う人間もいるだろう。しかし、金無しで生きている人間など居ない。欲望の差はあれど皆、金を欲しているのだ。

できる事なら金になりたい。皆に必要とされる金そのものになりたい。しかし、不幸にも私は人間だ。

だったらどうだ。金を信じて生きていこう。

それを生きる事の柱としても構わないだろう。金は裏切らないし、いつでも役に立ってくれる。インフレやデフレで価値が変わる事はあっても愛情のように目に見えないわけでも、ある日価値がゼロになる訳でも無い。

「可哀そうな人」

黙っていてくれ。もう何も信用できないのだ。君は私を拒絶したのだろう。だったら君も私にまわり付かないでくれ。

金儲けが愛を得られなかった私の愛の代替物を得るための代替行為だとしてそれを誰が責められよう？金はないよりある方がいいし ある方が楽しいだろ？それを否定できない限りは拝金主義が否定されるいわれも無い。

「心が汚いわよ」

だから、君にそんな事を言われる覚えは無い。早く、私の元から去ってくれ。

「ねえ、あなたは私を何故邪険に扱うの？」

もう傷つきたくないからだよ。それに君は私と関わりあいたくないのだろう？私は私を信じられなくなって金を信じる事にしたんだ。

「私の事、今信じている？」

信じているさ。勿論。だから拒絶された私は君を信じて君を避けた。

「私はあなたを拒絶したわ。でも、何故あなたは自分が感じた事を信じたの？私の言葉を理解した自分の心を信じたの」

そんな事を言われても仕方ない。そんな事考えられなかったよ。

「ねえ、今私があなたを必要な人間だといったら信じられる？」

分からない。拒絶と受諾のどちらを信じればいいのか。

「じゃあ、言うわ。私はあなたを必要な人間だと思っている。最初の拒絶はあなたを試していただけよ。私を嫌いにならないかどうか」

今更言われても信じられない。

「そして、私はあなたが好きです」

私は彼女を振った。それは正しかったのだろうか。でも、私はその時点で異性を信じられなかった。私はいったいどうすべきだったのだろうか？誰か、答えを教えてください。